

31-337



宿

橫瀨夜雨著



玉たひ足たしかなむぬる年のおもひ  
出に新しき詩と古き詩とをあつめて  
母きみよまゆらす

かぞいろは あはれと見ずや  
ひるの子は みとせになりぬ  
あしたゝずして

新月之卷

二十八宿

目次

新月の巻

野に山ありき

雪燈籠

小父君憎し

唇に

我は勞れし旅人なり

夕雲

川霧

手枕

紅

鞭

簑ぬすびと

堰の戸

鳴雪翁に

杉を贈りて

教へ子

美女塚に立ちて

梅雨晴

金蛇

父の手に枕せしめて

醉茗が子を抱いて

籠投捨て、

吾唇は燥けり

乙は死にけり

人は去れり

夕月の巻

影

尾上の月

祝言

うもれ木

ありわけ

花楸

焼野の雉

うつしゑ

賤機

お才(一)

お才(二)

河原柳

八重輪子

野水を憶ふ

ちぬの浦曲

花藻

柔肌

三十八宿



野のに山のありさの葱の蔓のなる花のほのくと

横瀬夜雨著

句ひて曉の紫は  
筑波に負へる色となり

雲、南に浮くとのみ  
かすめる空に鳥鳴きて  
竹の小弓を携へし  
子等は麥生に匿るらん

青葉の堤青嵐  
路こそ草になりにつれ

森の西なる夏沼の  
水は二人に開けしを

櫂は舷に横へて  
吹かるゝまゝに逝くまゝに  
風芳はしき鳥羽の海  
人よ舟には怖れずか

否、巖黒き大磯の  
浪に鍛へし妻なれば



船底に星照る朽舟の  
沈むは物の數ならず

君行る舟の覆りなば  
泳ぎ歸らん、水色の  
裾に絡まる萍は  
花は額に飾らんもの

濡れて艶ある黒髪は  
新に解きて瀝ぎけん

やつれたりとて見えぬ頬の  
など夢のごと蒼白き

せよと夫の言はゞこそ  
紅も薄らにさすべけれ  
故ならぬ髪は毛は  
搔上るたびに亂るるに

姉に戯る籠居に  
貝は敏く弾きしか

反りて落さぬ手の中に  
絹の毬のみ突き馴れぬ

春、華美なりし宮仕  
御守殿風に粧りては  
花散り埋む波殿に  
翻しし袖の長うして

初めて山といふ山を  
見しは月波の秋の雲

青さも交る山葡萄の子は  
猿もや探ると疑ひて

溪に潜める澤蟹を  
袖に押へて捕ふると  
指を噛まれし痛すら  
覺ゆるものを山見れば

山は野に在り、舟に居て  
背向になれば舷ぐに

吾手に絶る君が手の  
微に著き血のめぐり

小蜘蛛に似たる虫跳ねて  
静に軋る日の車  
耀ふ浪の眼を射んに  
傘の薄きやさしかけむ

人は見るとも夏霞  
驟く岸は草深し

眠るとならば頬を當て、  
膝にねよかし妹の

夢には戀ひし天もあれど  
春は武藏の野に暮れぬ  
人遠くして寂しさに  
今は心の破れたり

人の肌の手を觸るは  
新なるべき君が手よ

暫時は許せ、わが胸に  
遠退く浪の音あらむ

(土弄りする

下髪の

妹は君に

來れるなり)

朝咲く花の露なき  
露とも思へ君が手に

かゝる涙は遺瀬なき  
わが思出の涙なり

嗚呼、人何なれば胸を明けて  
吾掌を當つるらむ  
そよ海の底深く  
浪は鳴るとも聞ゆれど

垂れて頂に纏くべくも  
左手は君に把られけり

たゞ戦ける唇を  
小指のはしに觸れしめよ

寂しく生きし

われなれば

人を見んとは

思はねど

涙に曇る

瞳をあけて

對へば君も

さしぐむか

天の路に

離れての

雲は月波に

合ひぬべし

死にぬと言うて

欺くも

終に忘るゝ

われならず

君上行くとも

七星霜の

命は神に

誂へて

吾手に歸れ

一度は

妻と呼ばん

野の家

十年に過ぎぬ

瞬間の

夢は二人に

さめぬとも

千代の縁を

愛むべき

命は共に

許されず

君よわが名は

天雲の

白さに化りて

墓の

石の戸にさす

影の如

靡靡に

なりぬとも

東月波の

草がくれ

露にしをるゝ

花ありきと

痛める胸に

銘して

忘れぬほどの

情はあれかし

雪燈籠

雪を交ふる雨なれば  
春も名のみに歸りけむ  
南の椽の端濡れて  
内は小暗くなりけり

言はで立つ妹の  
髪も額も臙に  
雪の白さも地に落れば

雨に消さるゝ春日哉

花守、花を植ゑすなりて  
苑には石の轉ぶのみ  
小菊枯れて残れるに  
竹の折戸は鎖されず

露霜下りぬ朝より  
草は日に日に緑なり  
嗚呼紅の花咲くも



誰かまた我に手を貸さん

雨は斜に落し来て  
雪は軽くぞ入亂る  
光を包む灰色の  
天は夕になりゆくか

(許せ、夢なる

母をすら

忘れて傳ふ

頬の涙

乙に譲れる乳房すら  
再母の賜ふまで  
可愛しがられし中の子の  
我は拙き運命とて

孤獨に馴れし後ならば  
沈黙の森に留まらむ  
明日より出で、尋ねとも

君を何木の隈に見む

光青透く母衣蚊帳の  
一つ枕に三人寐し  
姉は鞍馬の雲珠櫻  
花薄うして散りぬれど

有りとは分かぬ天の雲  
母も天にと教ふれば  
泣くのみなりし丘に

君と相倚る我肩よ

花や煙と濁いて  
壁に這ふらむ烏瓜  
落日は兄妹を照せども  
影は三にもならばこそ

母のと聞ける懐かしさに  
面影遮ふ古鏡  
息吹きかけて拭へども

拭けども人の見はれず

小女なりける  
瞬間は  
優しき眉も  
在せしか  
鐵漿黒々と  
齒を涅めし  
とばかり母を  
覺ゆるに

家妻めかす

妹の

異なる人とも

見ぬからに

弱き吾子を

哀みて

母は妹を

遺しけむ

受くれば溜る  
泡雪の  
軽きを打ちて  
丸め作す  
雪燈籠は  
脆くとも  
灯入れて君の  
眉を見む  
長しと思ひし

辨も  
挿せばさしも  
相應もの  
晴の旅なる  
乗懸の  
襦袢に伽羅は  
留めたりや

十三塚の  
森隠

明日は越ゆらむ  
 霧の海  
 背向過ぎん  
 鞍の上  
 切ては山を  
 顧みよ  
 兄になればや  
 柔順なる  
 君が幼き

名を呼びて  
 母に代りて  
 命するは  
 今は終りと  
 なりにけり  
 妹よ

小父君憎し

眉もやがては剃るらんとや  
小父君憎し髯男  
たゞ若草の緑なる  
泥に誘へ、吾抱いて

結付草履の絹の紐  
甘酒しんじよと賺すとも  
茅花に足をとられなん

小父君参れ、岡に

わが唇の紅は  
母の乳房に觸れてなり  
顔な重ねそ頬の上に  
君が髯はよ、疼きもの

唇に

(狂せる人に)

霞露白き

短夜を

薔薇咲く野べに

倒れ伏す

女神の像の

唇に

汝が唇を

觸れて見よ

鏡曇らす

息あらば

眼にも宿さん

暁の星

たゞ野に遊べ

花白き

虹の浮橋

消え勝の

彩をや長く

有りと見る

少女の顔を

傷つけて

血を見てたのしむ

病人よ

蛇の脱

帯の如

かゝるを森に

見てだにも

弱き子眉を

ひそむるに

髪いかい

亂るとも

花には駒の

繫がれむ

君ようそぶけ

菩提の野に



我は勞れし旅人なり

三六

鹿島の海に湧回る  
潮を沖より卷き騰げて  
陸に落せし曉の  
風は雲井に潜みけり

蘿纏へる石の門の  
碧さを打ちて横さまに  
珠の簾と懸りけん

雨は尾上を遠く行きぬ

七日雪降る冬にすら

埋もれざりし筑波根の

翠よ色を失びて

雲は那須野に遁れしか

砂の上なる塔の

壊るゝ如く壊れては

萱家の村に茂り合へる

栗の大木もあとなく

山凹に植ゑし一うねの  
蕎麥は花こそ名残なれ  
立てる、伏したる、斜なる  
莖の弱さは摧けつゝ

葉と葉と摺れて鳴る音に  
口髭反らす地鼠の  
胸みて穴に引かまくも

栗般圃穂は断れて

額に渦巻く立髪も  
足に絡むしだり尾も  
漣なす雨に叩かれて  
野飼の駒もしをれけむ

霧にしめれる

雨引山の

林の奥に

猿飛びて

秋は空しき

山中の

石の蔭より

見下ろせば

常陸國原

揺かせし

雨と風とに

逆らひて

枯れける草か

野の西に

日は力なく

落つれども

眞青なる空に

雲絶えて

峯も麓も

しづかなる

山の上行く

我なれば  
御空に在るに  
似たるかな

路は雲母の

あらはなる

峠に沿うて

たどくと

行けども家の

まだ見えで

我は勞れし  
旅人なり

夕雲

汀にあしの花散りて  
霧こそ罩ひれ下つ瀬に

靡く尾花の末遠く  
秀づる峯は筑波嶺か

浪たゞ白き大利根に  
行暮らしたる旅なれば

我がなつかしむ山のみは  
かくさすもあれ夕雲よ

川霧

世の中は思へば安き浮きぬ哉  
枕流るゝ利根の川船

枕流るゝ利根川の  
舟に一夜の夢載せて

置霜白き舷に  
片しく袖は凍れるを

川つら深く立ちこむる  
霧は常陸に連なるか



手枕

人戀ひしき夕ぐれ五日月を精川べりに願みて

花の顔

色深く

君、頼へす

袖匂ひ

鐘の音遠さ

夕暮を

われ廣き野に

ひまよふか

手枕痛さ

をぶすまに

通ひし夢を

契にて

涙溢るゝ

わが秋の

月にを泣かん

君ならば

紅

とゞろと鳴らす足音に  
夢をさませしうたゝねの  
枕に敷ける編針とりて  
たゞ戯れに詠らべしか

新桑繭の絹を織る  
五色の糸は光あり  
小指の尖に綾とりて

いしくも編める妹よ

霞たなびく夕暮の

山をゑがさし編模様

匂へる房をそと解けば

中より花の現はれぬ

心にくきは佛の

母に似へる眉のみか

膝にこぼれし紅は

髪のみだれの釵とも

鞭

ほどけかゝりし絹の紐  
ゆるき靴もて青梅の  
幹はよづるに難ければ

眉ふりかくす放髪の  
姉なる姫は長のびて  
あぐる腕の白きかな

袖を抱へて敷石に  
かゝみ在せし二の君の  
まろき瞳のやさしさが

床に置きける銀の  
鞭をおろして走り來る  
庭は木立の縁して

鞭は短し枝高し  
踊り上りて下の枝を

拂へど散るは若葉のみ

母屋の屋根に鳩鳴けど  
二人の姫は言はで  
園の白日は寂なり

簀ぬすびと

上

二人在れど  
物つゝましう  
袂のみ  
折りつ疊みつ  
面隠  
隠るゝ妻の  
少は

心憎さに

白樫の

梢に獲たる

箴虫の

箴を解じて

櫻子が

并入の

黒塗の

箱に放たひ

む

掌に

握れば縮み

地の上に

落せば伸びて

丸く黒く

蠢く虫の

着欲しくも

箴は剥がれぬ

下

櫻散る

春の曉

花にのみ

夢は残りて

言はぬ

罪を攻むれど

すり脱けて

妻は逃げけり

袋虫は

裸になりて

玉匣

隠れし筈の

紅の

紐を噛み切り

唐文の

衣を纏ひぬ

塵を掃みて

織りける箋は  
高處なる

樹にこそかけめ

追剝に

追ひ落されて

哀なる

虫はふたゝび

巢籠りにけむ

堰の戸

煤たりし 簀の子の上に

三毛の雄の子猫生れて

家舊し 古き楡垣を

幾返り 雨は撲つらむ

井の中に 栗の落ちぬと

竹持ちて 弟騒げど

木より落る 雨を佗びつゝ



芋洗ふ姉は走らず

秋は今半なりけり

澁柿の紅き葉がくれ

大蜻蛉飛ぶに疲れて

牛部屋の板に宿れり

日暮るれば森に鴉啼き

夜明ければ田に鳴飛ぶと

草の中に藁箆は張れども

雨に濡れて 鞠のみ流る

蕎麥の花 白き島にも

山遠し 落穂の田にも

生ける案山子 生ける人なく

一村は 雨に濡れり

秋は今半なりけり

厩戸の馬も肥えたり

簑も腐れ 笠も破れよ

堰の戸に 水は溢さずや

七星 かくせる雲に

曉の 光迷へり

石に當て、鎌を磨けば

石の上には 雨は注ぎて

鳴雪翁に

賜の草茎干蛙

尻に槍を貫かれたる

冬の蛙の物語

膝なる子らを倦ましめぬ

君は興ある大父なり

み袖にかくす杯は

ねさめの老の薬てふ

如何に醸せる酒なれば  
顎髻白き顔の  
櫻の色になりぬらむ

木曾路に歸る馬追の  
單衣の袖は破れけむ  
鹿島の洋の秋の浪  
寒き潮に舟行らふ  
われは常陸の白水郎の子なり

相馬の御所に萩散りて  
蟋蟀すだく月の下  
南に落つる大利根の  
川門の水に釣上し  
蛸の法師やまゐらせむ

杉を贈りて

信濃の友に

八幡の森に雷落ちて  
千年の杉の倒れけり  
裂けたる幹は逆に  
荒木の矛を立つれども  
朝日出づれば湖の上に  
夕日沈めば河尻に  
影を落せし杉の木は

緑の土にかへりけり

埋みのこしし井の跡や  
多賀谷が館の三の丸  
都に入りし一姫の  
涙の手にも觸れにけむ

館は朽ちて美女塚に  
龍膽の花咲きながら  
洞となるまで蝕みし

杉は北にと折れにけり

檜は木曾に茂れども

杉は信濃に無き木てふ

見ようす色の木の膚の

馨るを君に配つなり

筑波に落つる布引の

瀧にて割りし板なれば

削らず塗らず素肌ながら

手箱に造れ新妻の

教へ子

教へ子の年たけて訪ひ寄れるがあり

巻きては野への野老蔓  
這ひ回ふ蔓のこと  
圓きは空の月の  
満る面に象りて

唯丸らかにしなやかに  
母に習ひし手なればや  
櫻散るなる嵯峨風の

假字は女にふさはしう

筆持添へて書かすまで  
幼なかりし童女も  
七年ぶりに相見れば  
眉美しう齊ひて

墨を塗りけむ唇に  
今亦さすは何の色ぞ  
筆は再執りぬとも

戯けて頬はよも染めじ

を書き難て

涙に暮れし舊事を

語り出さば袖屏風

君は面をかくすらじ

見よ秋の雨白くして

楓植えたる中庭に

毳突馴れしかぶさりの

君を見知れる母も在り

今宵は宿れ寒くとも

一人の雨の寂しさに

世を倦ひばてしうた人の

妻とは言はず妹よ

美女塚に立ちて

決れども落ちぬ刀根川の  
水や海とも湛へけむ  
空は晴れたる江の北に  
雲きらりと漂へり

菱を啄む鴻の  
櫓の下に浮寝して  
西は浅間の煙だに

水に浸りて遁ふとのみ

兒等が棹さす鹽舟  
覆れども浅ければ  
葦菜の中に荷りて  
處女も稀に濯ぐらむ

箱根は遠し

秋の雲

行くこと迅き



氏康が

青貝櫃の

鞍置ける

駒の蹄に

觸れてより

月波を越えて

西すべく

佐竹も鞭を

鳴らさねば

大野に靡く

花芒

青き色なる

草ありや

常陸は山の

稀なる

雲のはたてに

鷹逸れて

日の夕暮に

落ること

多賀谷が館も

落にけり

水に沈める

美女の

脆かりし名は

石に残りて

梅雨晴

きよ子生れし時、父なる友は雲遠き石見に在りき

野に雲を見る

梅雨晴の

光は空に

満ちしもの

朝旦生れし

可愛兒の

清と聞くこそ

嬉しけれ

花香はしき

夏なれば

露も白さに

凝るか

有りやの眉の

しなやかに

眼は涼しかれ  
新星の

剪らねば延びぬ  
産毛てふ  
髪はやがても  
肩過ぎむ

旅なる父は  
石見野の

八日の月を  
見ざりしや

君が聞くべき  
初聲は  
東の草に

觸れしのみ

草には見えよ  
夏花の

花にも背らん  
兒が面影

金蛇

葦の根洗ふ  
新潮に  
色まだ鈍き  
星落ちて  
薄霧閉す  
乾坤に  
靈の跡こそ  
遙なれ

八雲群る

曉あかつきの

光ひかりさし來る

眩まぼろしさに

耻はぢたゆたひし

昔むかし少女おんなは

暗くらの伴ともと

なりにしか

えでんの園うゑのの

春はるたけて

花はなまづ天あめに

散ちり交あへば

柔な肌はだ玉たまと

清きよき子この

瞳ひとみはやゝに

曇くもりけむ

摘つめば萎しなるる

紅くわんこうの

花はなを脚たむは

とがめねど

金かねの鱗うろこ

輝かがやかす

蛇へびは腕かみそに

纏まときしなり

手てを觸ふるるだに

耻はづかしき

乳ちちこそ衣きに

覆おほひたれ

項うなじにかゝる

黒くろ髪かみの

千筋ちぢんの髪かみの

弱よわきかな

人ひとなつかしき

朧おろ夜よを

花散里はなちりに

嫁ぐとて

鼓たてがみ青あお

鞍くら壺つぼに

捲まへる巻は

鳴ならさねど

さよばひ行きし

み越こ路ぢに

恥はを怨うらめる

命いのちならで

白しろ善ぜん菰こかくす

戸との奥おくに

籠かごれる我われを

誰たれか訪たづふ

曙あけぼのしほ領りやうす

おうろらの

かがよふ羽はねに

つつまれて

玉たまのみ門かどの



ほの見ゆる  
しおんの山に  
奔らんか

遙にてらす

山の端の

月に浮かるる

魂を

空も文なき

暗にして

誰、歸れとは  
磨く

鏡に映ふ

月の眉

薄紅の

頬の色を

つつめる衣の

袖破れて

釵の珠も

碎けけり

花はうつろふ

窓の外に

静心なく

徂く春を

調ふる琴の

絃されて

爪投げすてて

眺むれば

あれちらりと

漕ぐ舟の

夢多かりし

浪の上

静にかへる

夕ぐれ

雲は繪島の

沖に迷へり

父の手に枕せしめて

中島しづ子のわれと同じ病に罹りて先だちて死せるに

日月も星も

暗き世に

われ死なんとは

思へども

乳を賜ひし

母なれば

せめて生きよと

願ふらむ

生きよと祈る

母が手を

離るとも無く

離れ行きし

人の遠さを

傷むとも

誰か浮たる

戀と謂ふ

夢なる母の

肌ならで

知らぬ少女を

父の手に

枕せしめて

行秋の

鹿鳴く山に

埋めたれ

齊へる眉の

何時ととも

萎れ勝にて

見えしを

長さ睫毛を

閉ぢてより

影は瞳に

絶えぬらむ

水は流れて

海に落ち

炎は天に

立昇る

君はたのしや

百合馨る

よるだむ川を

越えしなり

縁にかへる

筑波根の

峯にも尾にも

雪消えて

墓標に植ゑし

八重櫻

彌生は花の

遅く散らむに

醉茗が子を抱いて

此處へと膝を指さして  
招けば目には領けど  
母が袂に面隠  
隠れて正に見えぬ子よ

忍び来りて背より  
肩を押ふる手を掴み  
抱けば膝に抱かれて

頬にこそ觸れ額髪

緋色勝なる附紐の  
長きは腰に手ぐまりぬ  
年はと聞けば彌生子に  
一歳違の姉と言ふ

指先輕う掌を突いて  
いつちくたつちく太右衛門の  
乙の姫はと教ふれど

耻てか人の口籠りて

母に結むすまる妹いもうとの

脇わきより襟えりを探たずねる時とき

知らず顔かほして眼まなこを外そとらす

稻子いなこは肩かたの美うつくしう

吁あ我われにも欲ほしき妹いもうとの

一人ひとりは母ははの許ゆるしなば

斯子このこを胸むねに挿さ抱かかり

常陸國原見せんもの

旅たびの情なさけに疲つかれては

歸かへらんことを願ねがふのみ

夢ゆめは緑きよの草くさの野のに

涙なみだも落おつれ母ははを思おもひて

篋投捨て

故ありて去られたる妹の、子らが像をつくりかけたるを見て

剃す習ひの産毛だに  
借みし子等がいたいけの  
型を彫ると篋執りて  
半成りたる像に  
對へば落る涙かな

(立てしばかりの眉毛こそ

今は薄らに延びにけめ  
七つに少き中の子の  
妙子は色の白くして  
猛き父には肖ざるもの

綾江は數て九つの  
今年の春は髪も結ひ  
帯も自づと結ぶらひ  
教へし母は人故に  
馬立の里に透れて



毛嫌する末の子の  
乳母の乳房に親むまで  
遣じとせしも奪られて  
采房くけたる長枕  
一人寝るに廣うして

髪かみの端はただに似にるやとて  
削ければ落おちる土屑つちくずの  
膝ひざに亂みだれて似にもせぬに

手てを過あやちて眼めを突つけば  
うらみや腫傷しむけさぬ

たとひ吾子わがこの顔かほは  
物ものにうつして置おかずとも  
胸むねの奥おくに記おぼして  
千代ちよも忘わすれじなまじひに  
見みれば泣なくべき像かたちなり

鏡かがみ投げすて、圓窓まるまどに

頬杖つけばそゝけ髪  
野に緑なる草を見る  
一都は西に八重櫻  
吾子も花となりぬらむ

たましく人の憫みて  
母はと問へば死たりと  
對へて足をかへすと聞く  
真か。母は一人居て  
死にもせぬものはらからよ

吾唇は燥けり

夕やけの雲  
西に入りて  
星影輝く  
天となりぬ  
一人さまよふ  
草の門に  
落つるは冷たき  
涙のみ

筑波の山の

猿飛岩も

踏みたたらかす

足はなえたれ

来よと言はば

のさうてだに

行きて君に

紐らんもの

吾くちびるは

燥けり

燥いて

焦れんとすれど

露を刺に貫ける

薔薇の花の

白きは人なる

君に似たり

肩に凭れども

答めず

手に觸るれども

許せし

人は居らぬ

古里の

銀杏の森は

骨立ちぬ

暗き夢より

さめ來れば

野上を光す

電の

影は痛める

胸の中に

差すとはすれど

留まらず

乙は死にけり

小牧厚衣の體死をいたむ

雲閉す 乘鞍岳の

山上に 乙は死にけり

秋草の

花に残りし

日光すら

西にと落ちて

足を曲げて 伏せる時よ

碓侍りて 臉を閉ぢしめし

氷雨ふる

嵐の中に

凍えつゝ

冷えつゝ 乙は

火を焚いて 暖めやらば

唇に 紅は潮しけむ

母を呼びて

取継らまく

聲すら

立たすなりしを

霊なる

雷の鳥の

岩がくれ

飛ぶと見れど

飛驒の嶺の

回より

人は下りず

なりにけり

嗚呼天をそり立つ

山は乗鞍

雲の上に

雲を繞らし

荒巖の

壊れぬ限

切めて守るか

乙が亡霊

人は去れり

人は去れり、さらに眷子と別れんとして

人は去れり

天の遠きに

手を舉げて

来よと招くを

眼にすれど

露多き野の

草原に

雲の薄さが  
行くばかり

人は去れり  
寂しさ迫る  
誰彼の  
暗さに立ちて  
名を呼べば  
隠れ勝なる  
糸遊の

現無の影も  
惜まるゝ

人は去れり  
昨日は乳の  
欲しかりし  
母も戀しの  
人ならず  
寝んに臉の  
眩ければ



白日の光の  
厭はしき

人は去れり  
水も流れよ  
雲も逝け  
一人の上の  
秋ならば  
葉山茂仙  
蔭亡せて

月波は冬の  
木立せよ

我には人は

電の

光の中に

來ぬるのみ

我には人は

電の

光の中に

去にしのみ

手は白かりき森の沼  
若葉の淵に櫻とりて  
水を弾きし玉ゆらの  
人は我より匿れけり

菱の實喰ふ鴻の  
岸に鳴く夜は萍の  
白める花も燻むらん

灰に煙る霧降りて

毛は黒かりき有明の  
灯を耻る對居に  
慎ましかりし物腰の  
夢のやうにも見えながら

色亂りなる花苑の  
星は新に輝かむ  
俤去りし朝より

わが世は暗くなり初めぬ

草長うして

瑠璃色の

山は常陸に

秀づれど

野の花に見る

紫の

月波に君も

離れ行くか

立つに艱まば

わが肩に

凭れとさゝやく

妹の

思無氣なる

面見れば

放しともなき

諸手かな

姉と言はるゝ  
年ならば  
憂身を膝に  
投かけて  
疲れし額  
胸に寄せ  
たゞ一時を  
睡らまし  
三櫛黒さ

毛の亂れ  
頬とすれくた  
寄添ひて  
我血に塗し  
瞳をば  
匂へる袖に  
伏せんと言ふに  
形は捨てぬ  
影を追ふ

涙は母も  
容すらむ  
ほの見し人は  
罪ありて  
我に匿れし  
處女なり  
都を西へ  
曉の  
月を裏ひて

落にけん  
稀には風に  
吹かれ行く  
悲しき人を  
夢みれど  
今は痛める  
胸の奥の  
俤人と  
なりぬるに

秋なり、醒めて  
詩の宮に  
我は廻らん  
籠の  
扉は打つなかれ  
妹よ

夕月之卷

夕月の巻

影

月の夕、ひとり過ぎ行く少女を野邊に見て

影まだ淡き夕月の  
照せる野べに俯きて  
瞳にあまる涙をば  
稀には袖に拭ふらひ  
静に歩む少女あり

風に戦く花すすき  
芒が中に一筋の  
路をし待ひ秋の野に  
映る我身の影見ても  
寂しからんを哀なり

いかなる憂を蔵めれば  
花の少女のたい一人  
解れし髪をかき上げて

濡るゝ裳裾をさながらに  
荒れたる野を越ゆるらむ

片足羽川の大橋に  
藍もて摺れる衣着て  
赤裳裾曳渡りけむ  
昔少女が面影を  
今眼のあたり見つるかな

手枕纏きて語りひし



我妹子ならば呼びとめて  
暫なりとも泣かさじを  
月に背きて行く人の  
悲しき影はわれ限りに

尾上の月

浪に漂ふ

舵枕

縁に結ぶ

假寝にも

八重の汐風

帆に受けて

一葉の舟と

浮びては

風なぎし思おもひの  
無なかりしわ

緩ゆるき流ながれに

花はな散ちらふ

磯いそ邊べ堤つみの

櫻さくら川がは

曉あけ深ふかく

立た霧きりに

別わかれし妹いもうとが

面おもては  
恰さながら胸むねに  
鑄いられしに

古ふるぬる里さとに

歸かへり來きて

夢ゆめ路ぢ静しずけき

筑つく波は根ねの

尾おの上うへに立たちて

魂たま籠かごる

巖の前に

月見れば

丈夫ながら

つらきかな

西、鳥羽の江の

白浪も

東、浪速の

漁火も

ありとは見えぬ

山上の

可愛しさ人の

墓に

添ふとは思へど

慰まで

二つ並べる

秀つ峰を

横ぎる月と

伴なひて

雲も留めぬ

み空より

千里に渡る

風の聲

聞くに袖こそ

濡り行け

眞珠採り小舟

夥多漕ぐ

おすとりわの

海中に

夕の雲を

願みて

八島の浦の

路遠み

眺めし空は

近かりしに

祝言

野末の菊を匂はせし  
日かけ傾くこの夕  
君はやさしき花妻を  
娶りたまふぞ嬉しき

千重の白雲隔りて  
山と川との遠ければ  
并揺ぐ新嫁の

花の君には見えねど

今宵の人の祝にと  
始めてあぐる酒杯の  
高き香に胸透きて  
聞け祝歌は成りにけり

眞玉手觸れし  
亂髪  
梳るに惜き

朝朗明

灯影に鳴らす

二弦琴

餘韻漂ふ

夕間事

紅に泥める

唇を

覆盆子の露に

濕す時

雪催の風に

曝されて

美し眉の

曇る折

夜渡る月の

桂男よ

妻は隣と

思へかし

八千代を契る

玉椿

幾久しくと

準らひて

(春の夜の夢に

馴染し枕をば

涙の堰と

爲すもある世に)

うもれ木

うつゝともなく  
夢ともなく  
眞たま手かはす  
にひふすま

むなわけすぐる  
そよかせに  
見えても耻ぢし  
はだ觸れて

子さへあげては  
可愛しさの  
いもせのなかに  
まさましを  
は、だに病まで  
世にあらば  
くも晴れよとは



ねがはねど

輕の池の浦曲

めぐれる鴨すらに

玉藻の上に

一人寐なくに

おもへばわれの

よきいへに

とつぐのぞみも

あだなりし

ねみだれやすき

くろかみは

とてもぬれなん

わが世なれば

おやゆゑせめて

よめらでも

とこをとめにて

身を終へば

つきかげひろき

小むしろに

かりさくよるは

憂くもよし

ありあけ

誰謂河原、一蒸抗之、誰謂宋遠、跂予望之、誰謂河原、曾不容刀、誰謂宋遠、曾不崇朝、琴子にわはりて生死さだかならざる横瀬正七郎君をおもふ

荒磯に騒ぐ浪の音を

八雲小琴に聞き做して

手枕安く眠る夜は

旅のつらさの知られねど

曉早く起き出で

浦曲傳ひに有明の

月の淡さを眺むれば  
遠なる人の想はれて

同じ常陸の國ながら  
鹿島の浦にさすらへば  
故里忍ぶ月波根の  
峰にも雲はめぐれるを  
薔薇の花櫛婀娜やかに  
侍り奉る令聞あらば

多の年を一度の  
音信無きもうべなれど

太平洋の旋風に  
船共に渦かれてか  
落機山に行暮れて  
蛇に噛まれたまひてか

然ては亡くなりし母君の  
み墓は獨りふも

なつかし君が俤は  
正に見る世の無かるらむ

浪逆の海の

夕霧に

見えがくれする

釣舟を

渚に立ちて

歸るやと

はかなき占も

待めしに

磯馴松が枝

ほのくくと

煙の中に

現はれて

沖にたなびく

八重がすみ

あかね潮したる

東はや

花  
櫛

髪かみに挿させる

花はな櫛かみの

花はなの影かげさへ

静しずかなる

軽かろき小こ舟ふねを

騰たぎ波はの江えの

水みづに泛うかべて

漂たふはひ

かとりん海うみに

權かみとりし

ゑれんの君きみが

おもさしは

露つゆもわが身みに

備そなへねと

小霧こぎり罩こめ行く

月波つきなみ根ねの

尾上を照す

夕月を

痛める胸に

鏝つけて

長き思ひを

宿さまし

山影落る

湖の

浪間の月に

榊さへば

うさねの夢は

つらくとも

焼野の雉

越後餘地の俗陰曆七月十四日の夕ぐれ未婚の男女一堂に會り、くじを引きて各々すか  
な定め、十六夜の月の入る迄は夜々遊びの庭に踊りたはれて、はかなき夢を結ぶとて、  
歌垣山に立ちならし、筑波根にがへひけん、それも昔とはなれるに。

月影寫る姿見に

濡れし前髪搔かぐとて

花の釵拔きとれば

宿るか月の朧にも

室谷昔笠傾けて

稀に涙はかくせども

若紫の玉櫛

肩に懸るがづらさかな

猿夜啼く筑波根の

峯の月こそ舊にけめ

母君ならで我胸に

手觸し人はなかりしを

今宵の月を形見にて

明日は絶えなん縁ながら  
何しに軽き装裾を  
笹野の露に打たせけむ

過し夢路を今更に

辿りてもとは思ほえど

空に知られぬ雲出て

せめて月だに隠れなば

我は焼野の雉

我は焼野の雉  
思出でては  
ほろくと鳴く



うつしる

白雲迷ふ

陸奥の

平の里に

月し見て

旅ならなくに

古里を

戀ふる夕の

わりてにか

七歳ぶりの

寫眞を

吾に寄すとて

妹が

またのをゆびを

染めにたる

墨こそはじめ

しなやかに

やさしかりける

母ははぎみの

幸さいくいませし

ころほひは

三み日月かづきなせる

汝なが眉まゆを

見みぬ朝あさとても

無なかりしに

手て離はな惜をしみ

わが肩かたに

縫ぬりてなきし

下した髪かみの

かたちながらに

らうたけて

花はな櫛くし匂におふ

黒くろ髪かみや

忘わすれて結むすぶ

夢ゆめ路ぢにも

白しろ河がはあたり

立つ霧に

忍び渡りし

おもかげの

かすかにこれと

似へるは

賤機

おオ

一

女男居てさへ

筑波の山に

霧がかかれば

寂しいもの

佐波の小島の

夕浪千鳥

彌彦の風の  
寒からん

越後出てから  
常陸まで  
泣きにはるく  
來はせねど

お月様さへ  
十三七

お父戀ふるが  
無理かえな

三國時の  
艱路を  
越えて歸るは  
何時ぢややら

やはり妹と  
背負繩かけて